実践報告

Kyoto iUP におけるチューターによる就学支援（II）

―学士課程におけるチューターセッション―

佐々木　幸喜 *#、立田　有香 **、岡田　幸典 *

要　旨

京都大学では、多くの大学と同様、正規学生が外国人留学生の修学・生活支援にあたるチューター制度が導入されている。チューター制度が留学生だけでなくチューターにとっても教育効果があることは他大学での先行事例でも指摘されており、それは、京都大学においても同様であると考えられる。一方で、チューター制度が十分に機能していないと考えられる場面も見られた。そこで、本稿では、京都大学の留学生、特に、学部留学生プログラム Kyoto iUP の学生に対するチューター制度に焦点をあて、Kyoto iUP の学生とチューター双方に対し実施したアンケート調査の結果から、チューター制度の現状と課題を明らかにする。また、アンケート調査結果をもとに、2022 年度にどのような取り組みを行っているか、それを紹介することにより、京大におけるチューター制度の今後の可能性を探る。

【キーワード】留学生、学部留学生、Kyoto iUP、チューター、留学生支援

1.　はじめに

本稿は、本誌前編（岡田・佐々木 2023）とともに、京都大学（以下、「京大」）の学部留学生プログラム Kyoto University International Undergraduate Program（以下、「Kyoto iUP」）に在籍する学生（以下、「iUP 生」）に対するチューターによる就学支援を報告するものである。岡田・佐々木（2023）では、予備教育課程に在籍する「予備教育履修生」（以下、「iUP 予備教育生」）を対象とした。本稿では、学士課程に在籍する「学部学生」（以下、「iUP 学部生」）を対象とする。Kyoto iUP の概要については、佐々木（2022）および岡田・佐々木（2023）に述べたため、本稿では割愛する。本稿で取り上げるのは、図１のうち③[1] である。

Kyoto iUP の大きな特徴として、在籍する学生たちの年齢が若いことが挙げられる。このことは、年齢が比較的高く、かつ、専門が特化した学生が大半である大学院留学生プログラムと比べ、学習面の支援に留まらない多方面からの支援が求められることを意味する。この問題意識をもとに、チューターセッションを計画してきた。しかしながら、チューターセッションを観察する中で、

* 京都大学国際高等教育院
** 京都大学国際・共通教育推進部
# 責任著者

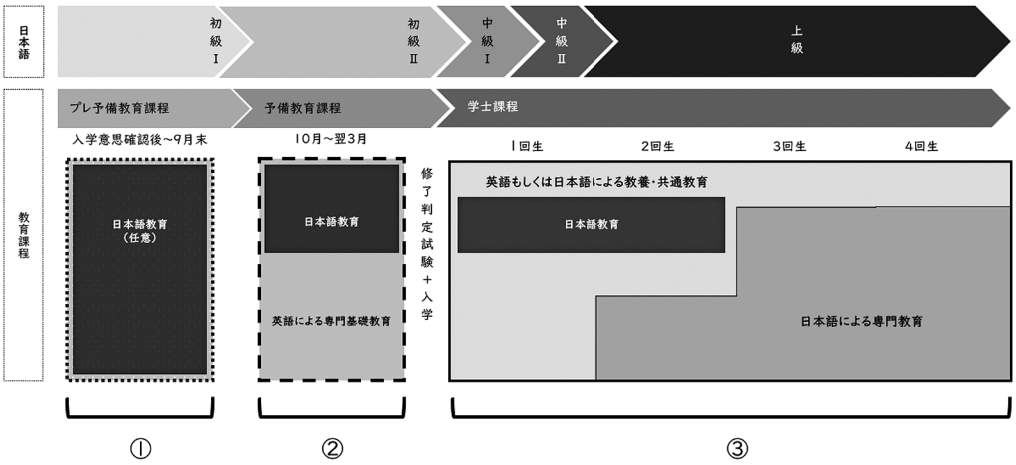

図１　Kyoto iUP の教育体系
出典：佐々木（2022：120）より、一部加工。

チューター制度が十分に機能していないと考えられる場面も見られた。そこで、これまでの実践をふりかえることで、その要因を究明したいと考えた。これが本稿の目的である。ふりかえりとあわせ、iUP 生とチューター双方に対し実施したアンケート調査の結果も確認することで、チューター制度の現状と課題を明らかにし、状況の改善を図っていきたい。本稿の構成は、次のとおり。2. では、Kyoto iUP におけるチューターセッションの方針を紹介する。3. では、2021 年度および 2022 年度のチューターセッションの実施状況を紹介するとともに、明らかになった課題を取り上げる。また、チューターを対象としたアンケート調査の回答をもとに考察を行う。4. では、今後の課題を述べる。

筆者らは以下のとおり、全員が Kyoto iUP のチューター制度に関わる実践者である。

・佐々木幸喜：国際高等教育院特定准教授。附属日本語・日本文化教育センター兼務。
iUP 予備教育生および iUP 学部生の日本語教育を担当。
2018 年度から Kyoto iUP のチューター制度に関わる。文系学生の支援総括。
iUP 学部生チューターおよび iUP 予備教育生チューターの運営に携わる。
・立田　有香：国際・共通教育推進部 留学生支援課 吉田カレッジオフィス（Kyoto iUP）教務掛長。
カリキュラム・コーディネーターとして iUP 生に関連する教務全般を担当。
2018 年度から Kyoto iUP のチューター制度に関わる。
iUP 学部生チューターおよび iUP 予備教育生チューターの運営に携わる。
・岡田　幸典：国際高等教育院特定講師。
iUP 予備教育生を対象とした専門基礎教育（化学）を担当。
2019 年度から Kyoto iUP のチューター制度に関わる。理系学生の支援総括。
iUP 予備教育生チューターの運営に携わる。

本稿の執筆にあたり、本稿全体の枠組みの設定は、佐々木が中心に行った。本稿全体についての検討や編集には共著者全員が関わっている。

2.　チューターによる就学支援

京大でも、多くの大学と同様、在学生が外国人留学生の修学・生活支援にあたるチューター制度が導入されている。京大におけるチューターは、「留学生の専攻分野に関連する専攻の大学院生等が、留学生の学習・研究・日常生活に関する助言・協力を行う」ものと位置づけられており、対象となる学生は、「指導教員がチューターによる個別の指導を必要と認めた者に限られ」る（京大 HP）。本稿では、この「チューターによる」「指導」を「チューターセッション」とする。なお、チューターセッションには謝金が発生する。チューターによる支援が受けられる期間は、在籍身分により異なり、大学院生と研究生が渡日後最初の 1 年間、学部学生が入学後最初の 2 年間である。iUP 学部生の場合もこれに倣う。チューター配置は、2020 年 4 月学部入学者から、学部に希望照会をする形で行ってきた。

岡田・佐々木（2023）でも挙げたように、チューター制度の意義ならびにチューターの役割をまとめたものとして、横田・白土（2004）がある。横田・白土（2004）に倣うと、チューターの役割[2]は、(i) 日本語学習の援助、(ii) 履修についての助言、(iii) 授業やゼミにおける勉学支援、(iv) 大学院受験のための助言、(v) 研究･実験の指導、これに加え、(vi) 友人の立場での生活支援、の 6 つに分けられる。横田・白土（2004）を参考に、筆者らが iUP 生に必要だと考えた就学支援の内容は以下のとおりである。

就学支援内容	例	横田・白土（2004）の分類
専門領域学習に関する支援	日本語による開講科目に関する質問対応	(ii)、(iii)、(iv)
日本語学習に関する支援	会話練習、日本語講習での授業支援	(i)
生活に関する支援	携帯電話の契約	(vi)

このうち、「日本語学習に関する支援」は、iUP 生のニーズ調査結果を踏まえ、チューターに活動を依頼することとした。2022 年度、佐々木は、2022 年 5 月時点で Kyoto iUP に在籍する 1・2 回生 34 名のうち 2022 年度前期の日本語授業を受けている 31 名に対し、質問紙の直接配布および聞き取りにより調査を行った。回収数は 31、回収率は 100%。質問の一つに、「今、日本語で困っていることはあるか」という項目をたて、日本語の使用状況を尋ねた。2022 年度の調査では、回答者 31 名のうち 30 名が、何らかの場面で「困っている」と回答した。表 1 には、2021 年度もしくは 2022 年度の前期に日本語中級 II[3] の授業を受けていた iUP 学部生の回答を一部抜粋し示した。表からは、ディスカッションやプレゼンテーションをするときに積極的になれない（通し番号 2）、自分の話す日本語が伝わっているか不安に感じている（通し番号 5）などといった、日本語を使うことに対する消極的な反応が見られる。これを少しでも克服できるよう、チューターセッションをデザインすることが求められる。

表１　日本語中級 II レベルの iUP 学部生が日本語で困っていること

通し番号	テキスト（原文ママ）	学年	文理
1	今は先生や私を留学生と認識して話している相手とならば会話することができます。しかし他の日本人の友達に話すときには分からないことが多いです。早さも違うし、使う言葉も分からないことがあります。	B1	文系
2	今は、日本語でクラスメートとのディスカッションやプレゼンテーションがありますが、よく自分の日本語能力は不足と感じています。日本語を勉強していますが、どうしても不足と感じて、授業を受けるのは難しいと思います。	B1	文系
3	It's very hard to interact with Japanese students, I feel talking to them is okay, but I feel akward with switching from ます・ですto ふつうけい . It doesn't feel natural.	B1	理系
4	Lastly, right now I even have more inspiration to learn. But with my below level Japanese, I dissappointed many teachers. I sometime can imagine between my selflearning and desire to learn in conflict to see who win. I will try harder every moment I have the chance.	B1	理系
5	日本人のクラスメートと話すとき、時々わからないことが出ます。自分が言ったことが日本語ぽくないかもしれませんので、クラスメートはほんとにわかるか心配しています。	B1	理系
6	今は大学の他の科目で忙しくなって、日本語を勉強する時間が減ってしまいました。授業内で全てをやり終わるようになりました。もし宿題が多く残されたら、なかなかできません。だから、今の調子もいいと思います。	B1	理系
7	中級１から中級２に上達すると、文法がどんどん増えているとともに、難しくなってきたと感じます。前に学んだことがある文法に意味が近いけど、使い分けのニュアンスがあって、こんなに多い数はあまり覚えられません。書くとか話すときはその文法を思い出せません。また、話す時、言いたいことがなくなっちゃったけど、相手が言わせるように待っていて、圧力を与えられて、不安な気持ちがします。	B1	理系
8	会話のときも、正しく、面白い対話が作れなかったり、他の人の話を聞き間違ったりして恥ずかしくなって、勉強を嫌ってきたのです。	B1	理系
9	日本語に関して一番大変なところは自分の表現する方法と思います。日本語で伝えるたびに、英語で言いたいことは知ってるけど、文法を作ったり語彙を覚えたりするには時間がかかりすぎるので非常に悔しいです。悲しいことに、理解するために日本語から英語に翻訳する必要がない目標をまだ達成していません。	B2	理系

3.　チューターセッション実施状況

3.1　2021 年度

3.1.1　概要

チューターの選出は、iUP 教務掛の依頼により各学部教務掛を通して実施。チューターと iUP 教職員とのやりとりは、4 月のチューター活動説明会から始まる。この説明会は、iUP 学部生との顔合わせも兼ねた。所要時間は 1 時間程度。説明の内容は、Kyoto iUP のカリキュラム、在籍状況、チューター活動内容、活動時の注意点など。また、チューター活動をした際には、必ず、その内容と学生の様子を Google Form により報告してもらうこととした。

学期中は、学部ならびに iUP 教務掛が、勤務時間管理、謝金処理、学生（チューター、iUP 生）への聞き取り、フォローアップ、必要に応じて関係者への情報共有を行った。併せて、チューターの活動報告は、iUP 教職員会議（月 1 回）で情報共有し、フォローを進めた[4]。これにより、活動および学生の状況の把握を常に心がけてきた。

9月には、iUP教職員会議およびiUP運営会議で、前期のチューターセッションを報告したうえで、後期の活動計画案を提示した。報告資料は、チューターによる活動報告とともに、教員による所感をまとめ、それをKyoto iUP内だけでなく、学部にも共有していくこととした。また、後期初回のチューターセッションは、教員が様子を見に行き、どういうことをチューターに支援してほしいのか、こちらの意図を伝えるとともに、iUP学部生にも伝えさせる時間をとることとした。また、前期の聞き取りを終えていないチューターが数名いたため、後期の早い段階で会い、話を聞いた。

3.1.2　運営上のポイント

2021年度のポイントは、**(a) 初回チューターセッションへの教員の同席、(b) チューターと教員による活動のふりかえり**、の2点である。

(a) 初回チューターセッションへの教員の同席

4月にチューター説明会を実施し、活動内容の確認ならびにiUP学部生とチューターとの顔合わせを行ったが、前期および後期開始時の初回チューターセッションにも同席し、どういうことをチューターに支援してほしいか、改めて伝えるとともに、iUP学部生にも伝えさせる時間をとった。これにより、チューターセッションでの活動を明確にすることを目指した。

(b) チューターと教員による活動のふりかえり

前期終了時、チューターに対し、前期のチューターセッションの「活動内容」「チューター活動で難しかったこと」を聞きとった。そのうえで、2021年10月にZoomによりふりかえりを行った。これについて、学部教員からの所感として、チューターとの面談の際、チューター自身も、他のチューターの話を聞くことで、後期の活動での方向性を考える機会にもなり役に立ったと聞いたという話があった。

3.1.3　2021年度をふりかえって

一方で、今後取り組むべき課題も見えてきた。そのきっかけとなったのが、「日本人学生と知り合いになるきっかけ作りが見つけにくい」というiUP学部生自身の声である。iUP学部生がコミュニティを広げるためには、本人が積極的に人と関わっていくことが何より大事である。それを支援するため、チューターにもその問題意識を共有してもらい連携することが重要であると考える。特に、年度はじめにKyoto iUP以外の学生と知り合う時期に、どのようにコミュニティを作り、入っていくかを、iUP生には、身近な在学生であるチューターとともに考えさせたい。2021年度までは、1対1のチューターセッションが中心であったが、2022年度は、グループでのチューターセッションも取り入れる計画をすることとした。瀬口・田中（1999）や門倉（2000）の提言にあるように、チューター同士が集まってグループを作り、その集まりが、学生が自主的に活動できるような空間を保障することができれば、その場がチュートリアルの場として機能することが期待でき、また、そこが留学生とチューター双方が集える場、あるいはチューター同士の相談の場にもなると考えられる。2022年度は、チューター自身が個々人で問題や悩みを抱え込まないよう、意見交換が気軽にできる場として、「チューター勉強会」を設ける計画をすることとした。

もう一つの取り組むべき課題として、消極的なチューターをどのように活用していくかが挙がった。積極的に、かつ定期的にチューターセッションの場を設けてくれていたチューターがいた一方で、活動をしないまま期を終えてしまうチューターもいた。チューターには、学習支援はもちろん、学生同士でしか話せないような日常での様子や、体調の変化等をある程度把握してもらうことを期待している。そういった情報をチューターからの報告で吸い上げ、iUP教職員でも学生の変化に早期に気づき、その対応を検討することに繋げたいと考え、2021年度に引き続き、チューターには定期的な面談と活動報告を行ってもらうこととした。特に、消極的なチューターについては、この

定期的な面談と活動報告を確実に実施するよう、教職員からもチューター、iUP生双方に促し、定期的な活動に繋げていけるようになることを目指した。

3.2　2022年度

3.2.1　概要

2021年度で明らかになった課題の克服につなげるため、2022年度の計画案を次のように立てた（表2）。表中、網かけを施したものが、2022年度に新たに追加することにした活動である。●は、その活動に誰が関わるかを示す。

3.2.2　運営上のポイント

2022年度のポイントは、2021年度にも実施した**（a）初回チューターセッションへの教員の同席**、**（b）チューターと教員による活動のふりかえり**、の2点に加え、**（c）初回のチューターセッションで用いる資料の共有**、を取り入れたことである。

（a）初回チューターセッションへの教員の同席

4月にチューター説明会を実施し、活動内容の確認ならびにiUP学部生とチューターとの顔合わせを行ったが、前期および後期開始時の初回チューターセッションにも同席し、どういうことをチューターに支援してほしいか、改めて伝えるとともに、iUP学部生にも伝えさせる時間をとった。これにより、チューターセッションでの活動を明確にすることを目指した。

（b）チューターと教員による活動のふりかえり

8月上旬に、チューター活動に関するアンケート[5]調査をチューターに配布、その回答をもとに、8月下旬に活動のふりかえり[6]を行った。ふりかえりは、教員とチューターとで行った。このふりかえりは、アンケート用紙をもとに進めることを想定していたため、iUP学部生は参加していない。所要時間は1時間。全体でのふりかえりの後、5人程度のグループに分かれ、ふりかえりを行った。学部に特徴的な事例もあるだろうと考え、同じ部局に所属するチューターができるだけ同じグループで話し合いができるよう調整した。ふりかえりには、iUP教員にも同席を依頼し、チューターとの間で意見交換ができるようにした。

（c）初回のチューターセッションで用いる資料の共有

（a）のとおり、佐々木が初回のチューターセッションの冒頭30分程度立ち合い、支援活動の内容および方針をiUP学部生、チューターとともに確認した。2022年度は、このときに資料を一つ持参した。その素材となったのが、春期講習の一環である文化体験の1つ、マンガ講座[7]において、

表2　2022年度の計画案

	時期	内容	iUP生	チューター	iUP教務掛	iUP教員
前期	4月上旬	チューター活動説明会	●	●	●	●
	4月	チューターセッション	●	●		●
	5月の連休明け		●	●		
	前期終了時		●	●		
	8月下旬	前期のふりかえり		●		●
後期	後期開始時	チューターセッション	●	●		●
	11月		●	●		
	10月～1月		●	●		

学生たち本人が制作した4コママンガである。このマンガをもとに、ストーリーライティングを事前に作成してもらった。作文の制限時間はおよそ10分で、インターネットや辞書の使用は不可とした[8]。初回チューターセッションに、佐々木がこの作文を持参し、チューターに日本語の添削をしてもらうところから、始めてもらうこととした。これにより、iUP生の得手不得手をチューターに知ってもらうと同時に、チューターの支援内容をiUP生に具体的に理解してもらうことをねらった。iUP学部生には、チューターに作文を見せることを事前に説明し、承諾を得ている。

3.2.3　2022年度前期をふりかえって

2021年度にあった課題は概ね解決できたと考えている。ここでは、チューターの属性を示しつつ、Kyoto iUPが各学部とどのような連携を図っていくのが望ましいかを考えたい。

まず、チューターとしての勤務年数を確認する。データは、3.2.2で紹介したアンケート調査（2022年8月実施）の回答に基づく。表3からは、チューター経験がまったくないと答えた学生が過半数を占めていることがわかる。

表4は、「iUP学部生と、どの言語でやりとりすることが多いか」の問いに対して、チューターがセッションで用いると答えた言語である。

8割弱のチューターが「主に日本語」でiUP学部生とやりとりをしていると答えており、iUP学部生が日本語に触れる環境を積極的に作ろうとしている様子が窺える。京大に在籍する留学生を対象とした2014年度の調査をもとに、家本太郎は、文系／理系、主要な教授言語、研究言語、日常言語の相違にかかわらず、研究活動における日本語の必要性は、強く指向されていると指摘している（家本2015）。iUP生に関わるチューターたちも、iUP生たちを取り巻く言語環境が多言語では

表3　チューターとしての勤務経験

2022年4月時点での勤務経験	人数	比率	累積数	累積構成比
0か月（＝チューター経験なし）	15	57.7%	15	57.7%
3か月	1	3.8%	16	61.5%
6か月	2	7.7%	18	69.2%
9か月	1	3.8%	19	73.1%
12か月	5	19.2%	24	92.3%
30か月	1	3.8%	25	96.2%
36か月	1	3.8%	26	100.0%
計	26	100.0%	26	

表4　チューターセッションで用いられる言語

チューターセッションで用いる言語	人数	比率	累積数	累積構成比
主に日本語	20	76.9%	20	76.9%
主にiUP生の第一言語（英語）	0	0.0%	20	76.9%
主にiUP生の第一言語（英語以外）	1	3.8%	21	80.8%
iUP生の第一言語（英語）と日本語の両方	3	11.5%	24	92.3%
iUP生の第一言語（英語以外）と日本語の両方	2	7.7%	26	100.0%
計	26	100.0%	26	

あるとはいえ、日本語が優位な環境だということを感じ取っているのかもしれない。

iUP 学部生が、主に日本語を使用する場としてチューターセッションを活用したいと考えていることは、各学部においてチューターを選出する際の参考情報として伝え、iUP 学部生によりマッチしたチューターを選んでもらうことに繋げたい。

表５は、「iUP 学部生とのやりとりで難しさを感じたことはあるか。あるとしたらどういうことか」の問いに対する回答である。「ない」と答えたチューターが 18 名（69.2%）いた一方で、以下のような点が挙がった。

チューターの活動内容と照らし合わせると、「専門領域学習に関する支援」（1, 3, 6, 8）に関する回答が比較的多く、「日本語学習に関する支援」（5, 7）がそれに続き、「生活に関する支援」はあまりないようである。また、２のように、iUP 学部生がチューター制度を十分に理解しておらず、iUP 学部生本人への指導が必要なケースもあった。

表６は、「iUP 学部生がどのようなことができるようになれば、大学生活がより円滑に進むと考えるか」の問いに対する回答である。「既に十分できていると思う」「特に思い当たるものはない」という回答が６名（23.1%）からあった一方で、以下のような点が挙がった。

チューターの活動内容と照らし合わせると、「専門領域学習に関する支援」（3, 5, 7, 11, 13, 14, 15, 21）と「日本語学習に関する支援」（3, 4, 10, 12, 16, 17, 19, 20）を重視すると考える回答が多かったのは興味深い。また、「生活に関する支援」（1, 2, 6）も挙げられている。注目したいのは、日本文化への理解が必要だというチューターの回答（8, 9, 18）もあったことである。チューターへの

表５　iUP 学部生とのやりとりで難しさを感じた場面・状況

	回答　※個人の特定につながるおそれがある箇所については、「iUP 生の氏名」などに置き換え、〔　〕内に記載
1	レポートの改善点を指摘したとき、アドバイスがうまく伝わらなかったことがある。英語で伝え直すと、意思疎通がとれた。
2	面談日程を事前に決めていたにもかかわらず、突然都合が悪くなり、LINE で面談をキャンセルしてほしいと当日連絡がきたことが２回ほどありました。また、週末に LINE で来週の月曜日に面談をしてほしいと依頼されたことがありました。教務掛から面談日程は直前で変更しないようにしてほしいと指摘されたため、後期はその旨を iUP 生に理解してもらえるように説明しようと思います。
3	最初は高校〔科目名〕でも専門用語は読めないし聞き取れていませんでした。私が英語ができないので、その単語について説明するのが難しい時が多いです。日常会話でも、そこまで使う頻度が多くない言葉は分からないことが多いです。
4	雑談時３限を英語で言えず伝わらなかった
5	ほとんどないが、私が少し難しい言い回しの日本語（ことわざや慣用句）を話した際は、理解できないということもありました。
6	〔分野名〕の文献は内容が抽象的で日本人の私でも正確に理解するのが難しい場合があり、そうしたときに、私からできるだけ〔iUP 生の氏名〕さんに分かりやすい表現を使って説明しますが、それが正しいニュアンスで伝わっているかどうか不安になることがあります。また、〔iUP 生の氏名〕さんがそうした文献を読んで理解したことを自ら「これは～～ということ？」と話してくれることもありますが、そうしたときに私が「もう少し～～という意味合いだと思う」とより正確な表現に言い換えるべきか、あるいは本質的なところは理解できていると判断してそのまま首肯するべきか迷うときもあります。
7	〔iUP 生の氏名〕さん自身が感じた気持ちなどを表現することについて、語彙の問題からか、少し難しそうでした。
8	具体的な単語は忘れてしまいましたが、（教授などは日常的に使うが、中学生などは滅多に使わないレベルの）難解な日本語の意味が分かっていない時がありました。

表６　iUP 学部生がどのようなことができるようになればいいと考えるか

	回答　　※個人の特定につながるおそれがある箇所については、「iUP 生の氏名」などに置き換え、〔　〕内に記載
1	電車にのるのが先日初めてだったらしく苦労したそうで、交通機関などの事前理解が必要だと感じた。
2	一対一は出来ても、複数の日本人の集団の中で喋るのは難しいと言っていた。これが出来たら学生生活がより楽しいものになるのは間違いないが、ノンネイティブにとって難しいのは当然で、特効薬はないのだろうと思う。
3	ですます調とである調の使い分けができていないことがあり、そこをもう少しできるようになるとレポートを書く際にも話す際にもより良いと思います。
4	会話のスピード感がまだ日本人と比べると若干遅めであるため、（上達のスピードはかなり速いと感じるものの、）よりスムーズにスピーキングができるようになると、日本人とのコミュニケーションがより円滑になりそうだと感じます。
5	専門分野の語彙がスムーズにわかるようになるとよりストレスなく授業に臨めるのではないかと思います（そのうち身についてくると思うので、あまり心配はしていませんが）
6	各種手続き
7	大学生活に影響が出ないが、専門科目に関する日本語をたくさん覚えば、研究などに役に立つ。
8	行間を読むことの重要性を知ることが大切だと思う。（言ったことが全てじゃないの？！という相手の気持ちも大いにわかるが…）
9	日本の流行みたいなものをおさえられると、日本人コミュニティにより馴染みやすいかとは思います。
10	敬語に対する苦手意識の改善。日本語で議論することに慣れる。
11	現時点で日本語を活用して充実した大学生活を送ることができていると思いますが、強いて言えば、専門科目で使用する日本語をもっと読み取り / 書き取りに慣れてくれば、専門科目（特に、〔特定の分野〕）の勉強がもっと順調に進むと思います。そのフォローは私の課題でもあるのですが。
12	リーディングとリスニングは得意なように感じる。ライティングとスピーキングといったアウトプットをもう少しがんばってほしい。
13	〔分野名〕に関しての日本語での単語や言い回しが分かるようになれば、今後の講義などにおいて理解が進むようになり、日本語の講義でも単位をとれるようになると思う。
14	専門用語を読めるようになること
15	日本語の大学の講義についていくのが一番難しいと思うので、教科書を買って、本を見ながら教授が言ったことを理解するのがいいと思います。
16	私と面談で１対１で話している時は私が丁寧な日本語を話すよう心がけているからか特に苦労はなさそうですが、友人等と大勢で会話するときはまだ自信がないことがあるみたいです。
17	擬態語が理解しにくいと言っていたので、この感覚や語彙を養えたら大学生活に限らず日本での生活がより豊かになると思う。
18	日本人の関係の築き方が自国の文化とどう違うかを正確に理解することが大事かと思います。特に後者について、「日本人は冷たい」、「日本人の関係性は薄い」などといった否定的な認識を持ってしまい、日本人のコミュニティに入ろうとしなくなった留学生を周りで良く見かけます。
19	（先生じゃない人と）日本語を話すことに対する心理的ハードルを下げること
20	日常会話　誤解なく自分の意思が伝えられたらよかったかも
21	実験レポートの書き方

アンケートは、教職員が iUP 生の状況を把握できることに加え、チューター自身へのふりかえりにもなると考えられる。すなわち、アンケートに記入することにより、チューターが自らの経験をふりかえる機会となり、また、全体でのふりかえり会でアンケートの回答を共有することにより、チューター同士が経験の共有をしつつ議論し、次回のチューターセッションの活動内容を模索できる好機になるといえるだろう。

4.　今後の課題

最後に、今後の実践上の課題を挙げておきたい。第一に、チューター活動の時間が極端に少ない場合、iUP 生にニーズがないのか、それともチューターセッションがうまく機能していないのか、あるいは、チューターとの人間関係に起因するのか、個々に確認しなければ分からず、その確認に時間がかかることである。場合によっては、マッチングがうまくいっていないこともあるだろう。適切なマッチングが実現するよう、仕組みを確立することが求められる。瀬口・田中（1999）が指摘するように、互いに不都合があれば速やかに申し出ることができるようにしておくことが重要である。チューターに対しては、具体的な役割、何をどこまでするのかをマニュアル化して示すことも必要かもしれない。加えて、水本・池田（2004）にあるように、チューターの職務を限定することで責任範囲を明らかにし、効率を図ることも考えなければならないかもしれない。また、下坂（2014）では、学生が困った場合、チューター活動に関わっている教職員の個人的関与により解決されてきたことが報告されている。第二に踏まえておく必要がある点は、チューターが、それぞれ個々に研究室の教員から指示を受けている場合もあることである。本人の研究や学業が多忙な場合は、あまり負担にならない活動をしてもらう必要があり、そのバランスを取らなければならないことである。第三に、iUP 予備教育生と比較して、iUP 学部生の求める支援は多岐にわたる傾向がある点もおさえておかなければならない。岡田・佐々木（2023）で報告したように、iUP 予備教育生に対する支援は大きく分けて２つ､同年代の学生との会話練習といった日本語に関するもの、日本文化や生活習慣の紹介といった生活に関するものが主であり、数学や化学、世界史といった専門基礎科目に関する支援はニーズがなく行っていない。また、主な活動の場であるオフィスアワーでは、近くに他のチューターや教員がいるため、相談や質問をすることも可能である。これに対し、上述のとおり iUP 学部生については、上記の支援に加え、専門分野の教科書や文献を読むなどの学習支援も行っている。支援の幅が広がる一方、どのような支援を期待するかは、学生それぞれで異なるし、普段行っていない類の支援を突然求められることもある。さらに、１対１の活動であり、周囲に他のチューターや教員はいないため、その場では相談できる相手もいない。自力で臨機応変に対応する必要性が増すということは、困難に直面することが自ずと多くなることを意味する。チューターが何に直面し、何に困り、どのように解決していくか、チューターが体験している困難や悩みを共有することも必要だろう。特に、経験年数の浅いチューターが判断に迷ったときの早期解決を目指すための体制と気軽に相談できる雰囲気の醸成が必要である。これに関し、iUP 予備教育生チューターについては、活動開始前にチューター交流会を実施し、チューター同士が知り合いになることで他のチューターに相談しやすい雰囲気づくりに努めている。また、活動の１つであるオフィスアワーでは、活動後に毎回ミーティングを行ってオフィスアワー中のグループセッションでの様子や今後の方針をチューターおよび教員全員で共有している。ここでは、教員はなるべく対等に接することで、教員にも些細な報告や気軽な相談がしやすい環境づくりを心がけている（岡田・佐々木 2023）。一方で iUP 学部生チューターについては、2022 年度前期に、チューター有志による「チューター勉強会」を始めることができた。佐々木も同席し､担当の留学生が抱えている問題やチューターセッションの意義などについて意見交換の場を設けている。今後は、個別だけでなく、グループでのチューターセッションも検討していく。学術的な議論ができる場を提供すること、また、正規学生コミュニティへの合流が難しい iUP 生に対して､新たなコミュニティを提供することを目指したい。

付記

アンケートへの回答を発表や論文で公表することは学生に説明し了承を得ている。また、本稿をなすにあたり、査読者の先生方には、数多くの貴重なご助言を賜りました。この場をお借りして感謝申し上げます。

注

1　Kyoto iUP に関する報告としては、以下のものがある。
①佐々木・河合（2019）
②岡田・佐々木（2023）、佐々木（印刷中）、佐々木・阿久澤・河内（印刷中）
③岡田・佐々木（2022）、佐々木（2022）

2　横田・白土（2004）が、大学によってチューターの役割は様々であるとしているように、学習・生活全般を広く支援するものから、論文執筆の支援にあたるものまでさまざまである（佐渡島・太田 2013、田口・吉田・大角・吉田 2020 など）。また、非母語話者に対応するチューターには、しばしば言語教育者の役割も重ねられる（ドイル 2013）。

3　京大の日本語科目は、初級 I、初級 II、中級 I、中級 II、上級の 5 レベルに分かれている。
中級 II は、JLPT N2、CEFR B2 を目指す学習者を受講対象とし、到達目標は以下の 3 つ。詳細は、パリハワダナ（2019）を参照。
・より幅広い場面で、自然に近いスピードの日本語の聞き取りができる。
・ある程度まとまりのある学術的な文章が理解できる。
・状況や場面の目的に応じた効果的な会話ができ、的確な説得力のある文章を作ることができる。

4　Kyoto iUP では教務掛全体でチューターからの報告や、学生の状況は追いかけているが、学生への連絡等は主に 1 人の職員が窓口になっている。ただし、その内容は、立田を中心に、掛で意見交換しながら行っている。

5　アンケート作成には Google Form を用いた。佐々木が作成し、iUP 教務掛が配布を担当した。アンケートの冒頭に、「アンケートで得られたデータは記号化して統計的に処理するため、プライバシーが侵害されることはないこと」「回答の内容が、個々人を特定できる形で iUP 生に知られることは絶対ないこと」を明記し、回答への協力を求めた。質問項目として、チューターの「所属」「勤務年数」、「担当する iUP 学部生の日本語レベルはどれくらいだと思うか」「iUP 学部生と、どういったところで、どういった内容のやりとりをすることが多いか」「iUP 学部生と、どの言語でやりとりすることが多いか」「iUP 学部生とのやりとりで難しさを感じたことはあるか。あるとしたらどういうことか」「iUP 学部生が今後、どのようなことができるようになれば、大学生活がより円滑に進むと考えるか」などを尋ねた。回答形式は記述式。回答期間は約 3 週間。配布数 34、回収数 26、回収率 76.5%。

6　前期のふりかえりは、8 月 29 日および 30 日に実施。教務掛が日程調整を、佐々木が聞き取りを担当した。

7　京都国際マンガミュージアムの協力による。

8　ストーリーライティングは、筆記産出を確認するためのタスクでもある。作文は手書きを求めた。これは書字指導に備えるためである。

参考文献

1　有田佳代子（2004）「留学生と日本人学生の相互交渉創出の試み」『敬和学園大学研究紀要』13, pp. 129–147.

2　家本太郎（2015）「留学生による言語使用の一側面」京都大学国際交流推進機構国際交流センター『京都大学の国際交流：大学の国際化を見据えた今日的課題の再検証　第 5 回アンケート調査報告書』, pp. 17–44.

3　伊藤孝惠（2010）「学部留学生チューターのチューター活動に対する認識：活動初期における 2 つの事例から」『留学生交流・指導研究』13, pp. 61–72.
4　猪俣由華里・西村政子（2022）「留学生チューター制度の現状と課題」『Journal of Inclusive Education』11, pp. 131–140.
5　岡田幸典・佐々木幸喜（2022）「理系学部留学生のための専門日本語教育の課題と可能性」『京都大学国際高等教育院紀要』5, pp. 103–117.
6　岡田幸典・佐々木幸喜（2023）「Kyoto iUP におけるチューターによる就学支援（I）―予備教育課程におけるオフィスアワー（ホームルーム）活動―」『京都大学国際高等教育院紀要』6, pp. 71–92.
7　門倉正美（2000）「大学における国際交流ボランティア：その現状と可能性」『横浜国立大学留学生センター紀要』7, pp. 13–26.
8　京都大学「京都大学に在籍する留学生の方へ」https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/students2/campus/tutor（最終閲覧 2022 年 9 月 25 日）
9　京都大学教育推進・学生支援部国際教育交流課（2019）『TUTOR GUIDEBOOK』https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/embed/jaeducation-campusstudents2campustutorguidancedocumentstutor2019.pdf（最終閲覧 2022 年 9 月 25 日）
10　佐々木幸喜（2022）「Kyoto iUP 生を対象とした「日本語上級（文献講読 IIIA）」での実践：再話活動による使用語彙の拡充を目指して」『京都大学国際高等教育院紀要』5, pp. 119–133.
11　佐々木幸喜（印刷中）「Kyoto iUP 生を対象とした日本語クラスにおけるチューターとの「話す活動」の実践と評価」
12　佐々木幸喜・阿久澤弘陽・河内彩香（印刷中）「講義聴解力育成のための専門日本語クラス試案―専門語彙に着目して―」
13　佐々木幸喜・河合淳子（2019）「オンラインによる渡日前準備学習：留学生活への円滑な移行を目指して」『留学生交流・指導研究』22, pp. 49–60.
14　佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践：早稲田ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
15　下坂剛（2014）「ピアチューターの活動実態とその教育効果・評価法」『リメディアル教育研究』9 巻 2 号，pp. 35–39.
16　瀬口郁子･塩川雅美･田中圭子（1999）「留学生と教育 より好ましいチューター制度の実現にむけて：質問紙による調査結果からの一考察」『留学交流』9 巻 10 号，pp. 18–21.
17　瀬口郁子・田中圭子（1999）「チューター制度の運用に対する提言：満足度と教育的効果の観点からの一考察」『神戸大学留学生センター紀要』6, pp. 1–17.
18　田口陽子・吉田聡宗・大角洋平・吉田真悟（2020）「留学生のためのチューター制度の現状と課題：論文チュータリングの改善にむけて」『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, pp. 17–30.
19　田口陽子･大角洋平･吉田聡宗･吉田真悟（2020）「チューターとは何か：著者性、ライティング教育、ネイティブ・スピーカリズムをめぐる試論」『一橋社会科学』12, pp. 69–89.
20　ドイル綾子（2013）「非母語話者に対する支援」佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践：早稲田ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房，pp. 249–252.
21　日本学生支援機構（2020）「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」（令和元年度（2019 年度）結果報告 https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/__icsFiles/afieldfile/2021/03/12/1_kekka.pdf（最終閲覧 2022 年 9 月 25 日）
22　パリハワダナ・ルチラ（2019）「京都大学日本語科目履修者の履修動向」『京都大学国際高等教育院紀要』2, pp. 1–20.
23　水本光美･池田隆介（2004）「理工系留学生にとって効果的なチューター制度」『専門日本語教育研究』6, pp. 55–60.
24　横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング：学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版

Tutoring Support in Kyoto iUP (II)

—Tutor Session in the Undergraduate Course

Yuki Sasaki*#, Yuka Tatsuta**, Yukinori Okada*

Abstract

Like many universities, Kyoto University has a tutor system in which current students assist international students in their studies and daily lives. Prior research has shown that tutor programs are educationally beneficial, not only for international students but also for their tutors, and this certainly seems to be true at Kyoto University. On the other hand, there have been times when Kyoto University's tutor system has not been functioning as well as it might. To address this issue, this paper focuses on clarifying the status and problems of the tutoring system for international students at Kyoto University, especially in the Kyoto iUP undergraduate program, through a questionnaire survey of both Kyoto iUP students and tutors. Based on the results of the questionnaire survey and an examination of the initiatives implemented in fiscal 2022, this paper also explores the future possibilities for Kyoto University's tutor system.

Keywords: International Students, Undergraduate International Students, Kyoto iUP, Tutor, International Student Support

* Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University
** Kyoto iUP Academic Affairs Office, Kyoto University
\# Corresponding author